

育兒實驗談

光藤泰次郎

一、幼稚園通ひ 私は子供を育てるに、どんな主義を以てしたかといふに、鍛練主義を以て養育しました。諺に可愛い子には旅をさせろとある通り、機會ある毎に旅をさせる流儀を採用いたしました。最初幼稚園まで見送りはいたしましたが、決してついで居るといふことは致しません。幼稚園から宅まで歸りまするにも、初の四五日はつれ歸りました。道に馴れましてから、自分一人で歸るやうにしつめました。尤も其の頃は、あまり宅と幼稚園との距離もはなれて居ませんでしたから、幼稚園の昇降を己一人でするに、至極適當して居たかと思はれます。

二、距離の増大 明治三十九年の暑中休暇後、牛込の方面へ轉宅をいたしました。此處から御茶の水の幼稚園までは、大人の足でいそいで三十分、子供足では四十五分乃至五十分は確にかゝつたので

あります。急に距離が増大したので、其の結果は如何あらうかと内々心配して居ました。本人は一向平氣なもので、朝は自分の行く方面も同じです。大抵一所に参りましたが、歸りは時間が一致しませんので、ずんずん先に一人で歸つて來ました。人力車は通る、荷馬車は通る、電車は通る、自轉車は通る、さぞ危い事であらうと心配は無論ないでもありませんが、それでも一度の過ちもな

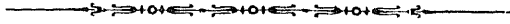
く通ひとはせました。

三、幼稚園通ひの結果 此の幼稚園通ひの結果は著しく子供を健康にし、足を達者に致しました。それ故たまの日照を擇んで、田舎へ遠足など致し、まする折にはかなりの遠距離をあるきまするに、殆ど大人と同様にあるくといふ結果を得ました。東京の高等師範學校に於て、年々長距離競走を試みますが、其の結果は、大抵第一寄宿舎のものよりは第二寄宿舎の方が成績がよいやうに聞いて居ります。それは第一寄宿舎の方は通學を要しませんが、第二寄宿舎の生徒は、毎日毎日四十五分程

の道程を餘儀なく通學せしめらるゝにかやうな結果の相違が得られたのであらうと思ひます。更に地方の學校になりますと、中學校あたりでは寄宿舎にはいる生徒もある代りに、三里四里の道を通ふ生徒もあります。運動會の徒歩競走に於て、如何なる生徒が第一等の成績を得るかといふに、大抵通學をしてゐる生徒であつて、宿寄舎に居る生徒は殆ど之に與らないやうな有様であります。それ故に私はかう信じて居ります。學校へ通ひまするに、身體の爲から申しますると、あまり近いのはよくありません、適當の距離を通して、不識の間に相當の運動をさするのが必要である、かう信じて居ります。所が近來交通機關の發達のために、折角通學に適當なる距離の所に住みながら、我が足を使用しないで、電車の便を借りるやうになつたのは、非常になげかほしい次第であると思ひます。電車といふ者は三つの不便を持ち來しました。第一學生に餘分の金をつかはせる、第二は徒歩の好習慣を廢させる、第三は折々遅刻をさせる、學校へ通ふ所の子供を持たるゝ親たち

は、よく利害得失を考へらんことを望みます。四、遠距離徒歩の試み 一年暑中休暇に房州富浦なる水泳場に参りました。其の際子供も連れて参りまして、日々海に入れて居りました。或る日北條へ行く必要がありまして、出掛けて行きました。富浦から北條までは約二里の道はありましよう。熱い時ではあり、道のりも餘程ありますので、どうしやうかと思ひましたが、例の鍛練主義で子供にあるかせました。始めは行けるかどうかと危みながら、折々は休ませながら、とうとう北條の町まで参り着きました。歸りには最早自信がつきましたのと朝の疲勞が回復したのでありましよう、二里の道を殆ど休むことなく、歸つて参りました。若しあれが不斷成りの距離を通つてゐなかつたら、とても此の試みには堪へられなかつたであらうと思ひますが、常に相當の距離を通學して居りましたお蔭で、先づ美事に成功いたしました。

それからその翌年の夏矢張り富浦へ参りまして、子供も共に連れて参りました。一日鋸山へ登山



しやうと思つて出かけました。昨年の経験もあり
ますことと子供も共に連れて参りました。保田ま
で汽船の便を借り、保田へ上陸して、愈ゝ鋸山
に登りはじめました。子供は外の者と同様に駒下
駄で登りました。随分暑い日でありましたが、日
本寺の方から、五百羅漢のあたりを経て、難なく
絶頂に登りました。暫く休憩をして、あたりの好
景を展望して、さて石切場の方へ下りそこを見物
して金谷へと下りました、それから富浦まで道程
四里、これは昨年よりは、更に樂に子供はあるき
通しました。そこで私はかう考へました。若し子
供の時から、適當に訓練をしたならば、一日に十
里や十五里の道を歩行ても平氣で居られるやうに
なるにはさして困難ではなからう、訓練といふこ
とはかういふ事にも必要であると考へました。
五、水に馴らす事 幼少の折から冷水摩擦をさせ
て、皮膚の丈夫さを増すやうに工夫してゐること
は、前にも一寸申しましたが、此の外、水に馴ら
すといふことをやつて居ります。都會に育つ所の
子供は兎角、天然に接觸する所の機會に乏しい、

それ故に、日曜なり暑中休暇なりには、つとめて
田舎に出かけて、天地の大自然に接觸せしめるこ
が必要であらうと思ひます。漁師の子供などを見
ますと、極少さい時から海にはいり、海岸で遊ぶ
からして、よく水に馴れて、少しも波に驚きませ
ん、皮膚も打見のから如何にも丈夫らしく思はれ
ます。それで私も子供を三つの時から海水に入れ
ました。一體海水に入れるのは幾つの時から入れ
るのが適當であるか、醫者の方の説は知りませ
んが、私の経験では、餘程効があつたやうに思はれ
ました。第一に夜非常によく熟睡し、第二に食欲
がまし、第三皮膚が丈夫になりました。其の外一
般健康状態が餘程良好になつたと信じて居りま
す。
少し大きくなつてからは、幾分水泳の練習にもな
ることと、大抵機會があればつれて行く事にして
居ります。しかし水泳の練習のことは、まだ幼稚
園時代では殆どいふに足りません。けれども兎に
角水に親しみ、水をおそれず、後來水泳練達の基
本だけは或は得らるゝでないかと思ひます。水泳

練習は小學時代の後期或は中學時代に於て敢へて遅くはないと思ひますが水に親しませるは、幼少の時代の方から行せる方がよいかと思ひます(完)

個人主義の弊

鹽野奇零

この個人主義なるものは、多少よい所もあり、所謂天上天下唯我獨尊で、我は我なり、自主獨立決して他人の干渉をうけないと云ふ氣風で、天涯地角到るところ青山あり、父母妻子兄弟親屬なども自分より重くはない、自分の欲するところは何者にも妨げられないといふ考であります、思ふにこの個人主義の發展は、各人平等の憲法となり、萬里絶域に領土を擴めたところの原因であらうかと思はれます、日本は元來この個人主義とは正反對の家族制度の國で、新民法も殆んど兩主義を折衷したやうな主義をとつてあります、然るに泰西文物の輸入と共にこの個人主義といふものが、追々行はれて來ることは確かなことで、又現に行は

れつゝありますから、その弊害を知つておくことは甚だ必要なこと、思ふのであります。第一、個人主義は申すまでもなく家族主義又は國家主義とは反對であります、自分より他のものは見ないのであるから、國家のために生命財産を擲つやうなことは甚だ薄い、この主義の極端なのは共和政治ですが、共和政治の國に於ては、兵士や軍人の愛國心は、君主政體のそれよりも遙に薄いので、随つて戦闘の關係に於ても弱いといふことは、今日の定論といつても宜しいのです、日露戰爭に於ても、露國は君主獨裁の國であります、歐羅巴に發達して來た所の極端な個人主義が、其の國人の間に浸染して、生命あつての物種である、國家は自己の利益のためにあるのである、などといふ考が兵士軍人の間に抱かれてゐるので、自然と戦闘に弱いことになつたのであります、之はひとり露國ばかりではない、個人主義の盛んな國はこれから戰爭はだん／＼弱くならうといふことは、斷定しても宜しいのです、つまり個人主義の第一の弊害は、非國家主義になるといふとです。